

手づくりハザードマップ作成手引き(参加者向け)ワークショップ 2 日目

発行:愛知県建設部河川課(令和7年3月)

■ワークショップ 2 日目の進め方

スタート

A マップ仕上げ
(グループで120 分)B 発表会・マップ活用 の検
討(グループで 40 分)C マイ・タイムライン作成
(全員・個人で 45 分)

終了

(1) マップ記載内容の確認 (60分)

ワークショップ 1 日目で作成した各グループのマップが統合された手づくりハザードマップが配布されています。

自分たちのグループが作成したマップの内容が正しく記載されているか確認しましょう。

(2) コメントの記入・マップの完成 (60分)

勉強会/まち歩きの中で出された意見や、過去の水害経験など、手づくりハザードマップを見る人に伝えたいコメントを、マップの空欄に記入します。

まち歩きで撮影した写真を取捨選択し、レイアウトします。

(3) 発表会 (20分)

グループで仕上げたマップの発表会を行います。

(4) 手づくりハザードマップの活用方法の話し合い (20分)

各戸に配布したり、地域の寄り合い所に貼り出したりと、完成した手づくりハザードマップを地域で活用する方法について話し合います。

(5) 勉強会「命を守る河川水位情報」

動画「みずから守る川の防災情報」を視聴して、見るべき水位計とマイ・タイムラインの書き方を学習します。

(6) 勉強会「マイ・タイムラインの作成に向けて」

自宅の水害危険性を知り、避難の必要性を理解するとともに、水位情報と避難情報の関連、みずプロメールなどについて学習します。

(7) マイ・タイムライン作成

勉強会で学んだことを基に、避難に向けて「いつ」「だれが」「何を」するのかシートに記入し、マイ・タイムラインを作成します。

お疲れさまでした。手づくりハザードマップとマイ・タイムラインの完成です！

話し合った活用方法に合わせて地図を印刷し、いざという時の行動に役立てましょう！

「(1) マップ記載内容の確認」の進め方とポイント

① 手づくりハザードマップの目的を再確認しましょう

市町村が配布している洪水ハザードマップからは、地域で予想されている最大規模の被害を知ることができますが、その状況になってから避難をしようとしても手遅れです。

手づくりハザードマップは、そうなる前の「内水氾濫(側溝からあふれた水などによる浸水)」が始まり、さらに強い雨が降っている状態」を地図にまとめることで、避難の早期判断と行動につなげることが目的です。

② グループで作成したマップの内容が、正しく表現されていますか？

配布された手づくりハザードマップ(ワークショップ 1 日目で各グループが作成したマップを統合したもの)に、自分たちのグループのマップの内容が正しく表現されているか確認します。その際、訂正や変更、書き加えたいことがあれば記入します。

③ 避難所や一時避難所が記載されていますか？

早い段階で避難経路が遮断されることが予想される地区では、「一時避難所」の取り決めが安全確保に重要で

す。一時避難所は、洪水ハザードマップで表示されている浸水深よりも高い建物があり、ある程度の広さと公共性を持つ建物や高台にしましょう。民間施設の場合は、町内会で事前に所有者などと話し合いをしておくとう良いでしょう。

④ その他の確認事項

○水の集まりやすい「くぼ地」
水が集まりやすく天井まで入る「くぼ地」では、堤防決壊前であっても、ゲリラ豪雨などで急激に水が集まった際に大変危険です。

○避難の際の危険箇所
側溝や突起物など、避難の際に危険となる箇所の位置を確認しましょう。

※ただし、足元が見えない段階での外出は大変危険です。足元が危険になる前の早めの行動が重要です。

○地図に掲載する写真
まち歩きの中で撮影した写真の中から、地図に掲載する写真を選びましょう。

○その他
ポンプやひ門や緊急時駐車場など、地域独自の注意点があります。それが地図に掲載されているか確認しましょう。

チェック

■完成した手づくりハザードマップの例(安城市東栄町)



手づくりハザードマップは、行政が作成する地図とは違い、水害や地域の課題を学ぶ過程が重要です。

この例にとらわれることなく、参加者の意見や住民に伝えたいことをまとめましょう。

「(2) コメントの記入・マップの完成」のポイント

①グループで作成したマップの理由を記入しましょう。

なぜその場所を青く着色したのか。また、なぜその場所を一時避難所とし、その通りを避難経路としたのでしょうか。

手づくりハザードマップを見る人に伝えたいことを記入しましょう。



②「過去の豪雨体験から得た知恵や対処法」をまとめましょう

平成12年東海豪雨や平成20年8月末豪雨といった大きな水害、近年発生した豪雨・台風などの経験を地域の皆さんで話し合い、地図を読む人に伝えることは、非常に重要です。そのときの危険や感じたこと、予兆、取っておけばよかった行動などについて話し合い、まとめましょう。

過去の豪雨体験から 得た知恵や対処法の例

・ポンプ停止とともに浸水が始まった。ポンプ稼働条件やその確認方法を記載する。
・地域で最も高いところは川の堤防の上。もしものときの一時避難所や避難路として記載する。

住民に伝えたい思い の例

・いざというときにしっかり排水できるよう、日ごろから側溝や水路を清掃しよう。
・地域のラジオの周波数を記載する。・インターネットで〇〇橋の水位を確認しよう。

「(4) 手づくりハザードマップの活用方法の話し合い」のポイント

手づくりハザードマップを作る過程で水害を学ぶことも大切ですが、地域で活用し、そうした水害の危険を語り伝えることも大切です。地域全体で共有し、地域に根付くマップにしましょう。

- ・全戸に配布して、市町村の洪水ハザードマップと合わせて各家庭で掲示する。
- ・小学校、公民館や地区内の病院など、地域の皆さんが日ごろから集まる場所に掲載する。
- ・手づくりハザードマップをもとに、大雨行動訓練※を実施する。

※“みずから守るプログラム”には、手づくりハザードマップを活用した“大雨行動訓練”があります。是非、定期的に訓練を実施して、日ごろから水害に備えてください。

「(7) マイ・タイムライン作成」のポイント

「自ら避難行動を起こすには、どうしたらよいか」が分かりません

手づくりハザードマップは、自ら避難行動を起こすにはどうしたらよいかについてはまとめきれないという問題がありました。

早めの避難の重要性を理解し、確実な避難のきっかけに！

「いつ」、「だれが」、「何をするのか」を整理します。

大雨が降り、川から水があふれる前に安全な場所に移動しておくためには、どのように川があふれるかを知り、それに応じた備えをしていく必要があります。

また、水害時に発令される警報などの種類を知り、その読み解き方を理解することが重要です。いざというときに慌てずに行動するために、大雨が降る前から川の水があふれるまでの間に、いつ、だれが、何をするのかをあらかじめ時間軸を意識して整理することで、避難行動を起こすかを考えきっかけづくりに役立てます。